

空に閃光、激震が走った

海は穏やかだった。航海も快適だった。

一月十七日午前五時四十五分、神戸市東灘区の沖一・二キロに浮かぶ六甲アイランドのフェリー埠頭第一バースに、松山經由で到着したばかりのダイヤモンドフェリー所属の「フェリーダイヤモンド号」(九、〇三トン)。連絡橋を渡る一般乗客七十人の足取りも軽かった。車両百五十五台の運転席にはドライバーが座り、船尾やサイドランプから次々に降ろされていく。「ちよつと早かったな」

——。船長室で伊田照夫(四〇)は、航海日誌に「定刻より五分早く到着」と記入していた。

そのころ、僚船の「クイーンダイヤモンド号」(同)は明石海峡航路の2号ブイ

を通過、明石海峡大橋の下をくぐり3号ブイとの中間付近にいた。

北西に位置する明石市立天文科学館の上空を青白い閃光が走った。ふだんは見えない明石海峡大橋のケーブルが、シルエットとして浮かび上がるほどの光量だ。デッキからその光を見た船長の新村成敏(四〇)は、自分の目を疑った。何が起こったのだ。

「フェリーダイヤモンド号」では四十六分、「ドーン」という大砲を放ったような音と衝撃が船体を襲った。船底を突き上げるようなうねりが船尾から来た。直後の横揺れで船と旅客ターミナルを結ぶ橋の連結部分が斜めに傾き、デッキから

はずれた。最後の乗客が渡り切ったのはわずか四、五秒前だった。車を渡すための可動橋も三十五台が渡り終えたところ、海中にはね落とされた。

伊田は、止めたはずのエンジンが全速力で回り出し、船尾から岸壁に乗り上げると思った。船長室を飛び出し、ブリッジに駆け込んだ。計器を確認しようとしたら、海面から高さ二十一メートルもある窓の外で、神戸の街が大きく揺れていた。

南側にあるフェリーターミナルは次々に明かりが消えていく。水道管も破裂、水を噴き上げ始めた。眼下に広がる埠頭にはヒビが大きく走り、水銀灯は倒れ、駐車場のアスファルトが一メートル以上も陥没、乗船を待つトレーラーの荷台部分がつんのめるようにくぼみに落ちた。

対岸の阪神高速湾岸線の高架路面も波を打った。昨年四月二日に開通、ライトアップされ白い優雅な姿で神戸港の新しいランドマークになった斜張橋「東神戸大橋」(全長八百八十五メートル)が、闇に吸い込まれた。大阪まで途切れることのないナトリウム灯もムチのようになり、瞬時に消えた。P&G本社ビルの非常用の電源にバックアップされた避難誘導灯が光っているのが、妙に印象に残った。

六甲山のふもとから海岸まで百万ドルの夜景を演出する光が、輝きを失っていく。フェリーの南西一・五キロ、四十階建て(高さ百三十八メートル)と六甲アイランドで最も高いマンション「イーストコースト三番街」がきしみ、音を立てながらしなっている。さらに西の三宮付近では、高さ百三十二メートルの神戸市役所や百五十八メートルの神戸オリエンタルホテルも揺れていた。まるでゴジラが建物を引っ張り振り回したりしているような揺れだ。神戸の大パノラマは、その様相をすっかり変えていた。

明石海峡を航行していた「クイーンダイヤモンド号」も、突き上げられた。大きな波に翻弄された瞬間、海面で船底をたたくウォーターハンマーより数倍も激しい衝撃に襲われた。

営業係長の野口郁雄(四〇)や乗客が衝突、座礁を直感し、悲鳴とともに跳び起きた。新村は「車両甲板で爆発だ。エンジンストップ」と、ブリッジの二等航海士に叫んだ。右舷に走った。火災の有無を確認するためだ。

新村には苦い思い出があった。四年前の五月の連休中、大分行きと同じ船で爆発予告があった。

船に無線連絡があったのも、同航路のほぼ同じ地点。運搬中の自衛隊車両に対する嫌がらせだった。だからその瞬間爆発を予測した。だが、どこにも爆発も火災もなかった。

のちに兵庫県南部地震、一般に阪神大震災と呼ばれる大地震の始まりだ。

